
限りある資源としての死体再生法

和泉あらた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

限りある資源としての死体再生法

【Nコード】

N0914N

【作者名】

和泉あらた

【あらすじ】

空想科学祭2010参加にあたり、事前の作品として以前投稿していたSFチックなホラーを再UPしました。自分の書いている他の作品とは、ジャンルや表現が異なると思い一度削除していたものです。

まだまだ若い男性が暮らすには不便だけれど、私が東北の田舎に越してきたのには訳があった。

若者離れが進むこの地域では、減り続ける人口を止めるために大規模な工場を建設し、雇用での誘致やそれに関する数々の商売で町を盛り上げていた。

町が目をつけたのは五年も前に大多数の賛成で成立されたある法律だった。

“死体は資源の一部、燃やしたり埋めたりするべきではない”

という持論をテレビで展開し、多数の信者を獲得し人気になった思想家は、その人気を盛り上げたまま政界に進出、若干36歳という若さで日本の首相の座についた。

着任するや否や、その持論のままの「死体資源再生法」をほとんどの反対もないまま可決させた。

これによって人肉はもとより、皮や骨まで食器や洋服などに加工され世に出回ることになる。

直前に起きた酸性雨による農作物の深刻な被害や、鳥インフルエンザや狂牛病による家畜を大幅に減らしたため、この法律は今の世に必要なものとされた。

けれどいきなり今まで家族だったものの死体を加工して食卓に並べる勇氣があるものがあるわけでもなく、死体は闇取引で業者に渡し今まで通り火葬してもらうのがほとんどだった。

そんな中、東北のこの地区では国の援助を得ながら東京ドーム50個分という大規模な死体加工処理施設を三年かけて施工した。

農作物の被害で職を失った者や、それよりも前からずっと続いていた大不況による失業者たちが次々に集結し、町は労働の場として

賑わい、またたくまに成長した。

衛生的で完全マニュアル化された死体の選別や国お墨付の安全マークなどで、すぐに全国のスーパーに人肉が並び、骨から作った食器や皮から作った靴や服、脂肪を固まらせて入れた枕などが溢れた。最初は敬遠していた人達も、他の肉の10分の1程度の値段で手に入り、誰の肉かわからないこともあり罪悪感も余り覚えることはなく、すぐに一般化されていった。

そして次々と死体ビジネスに関する新事業が乱立して、さらには活性化していく。ここは夢に溢れた若者が集う場所となった。

私もそんな一人で、住み慣れた東京を離れてこの地にやってきた。とりあえずは寮と食事つきの死体加工上で働き資金を集めようと、着のみ着のままやってきたのだ。

死体を食することや、洋服や食器に使うことが当たり前になってきたとはいえ、まだまだ死体加工の仕事自体は底辺のものだった。社会の波からもれたものが行き着く先というイメージがあったから。

そのため東京の仲間や家族には行き先も告げずに逃げるように飛び出してきた。

けれどそんな死体加工の仕事を経て、自分の企業を立ち上げ億万長者になったものもいるという。

夢は膨らんできていた。

死体加工の仕事は思った以上に過酷だった。

高額な報酬を得る代わりに精神はどんどん削られていく。仕事は有無を言わず毎朝くじ引きで決めて割り当てられた。

人の形をしていないものを担当しない日は比較的楽だったが、まだ人間そのものの形を見るはめになる日はとても辛かった。

特に死体の選別を担当する日なんて……。

それでもお金がたまらない間は職を失えば同時に住む場所も食事

も失うのと同じこと。
少しの辛抱だった。

ようやく企業でできるだけの資金がたまったのは1年たったときだった。

給料は利子の高い会社の経営する金融機関に預けたままで、手はつけていない。

というよりもこんな仕事をしていては休日遊ぶ気力も無く使い道などなかったのだが。

もとより1年の契約だった私に対し、上司は快く退職を許してくれた。

実際働くほとんどのものが1年契約で、それ以上は精神に支障をおかすと企業内のカウンセラーが示していたからだ。

そして暫くの間休んで考えるようにと住む場所も当分の職も紹介してくれた。

簡単な事務の仕事で給料はよくないが、同じようにこの工場で働いていた仲間が勤めているとのことでの安心感もあった。

しばらく楽な仕事をしながらたまったお金で起業の準備を始めよう。

今は疲れてアイデアも何もないけれどお金だけはある。

ゆっくり休んでいれば何かいいことがあるかもしれない。

退職日、最低限の荷物を持って仲間に別れを告げた。

事務で働く会社はこの工場から遠く離れたところにあるという。

同じ一年契約を果たし終えてものたちが、新しい職場に向かうバスに乗りあう。

ざっと40人くらいだろうか？

加工処理場には約3万人以上の人が働いているだろうし、一日にこれくらいの退職者が出るのかもしれない。

そこで気付いた。

果たしてこれほどの人数を使える職場などあるのだろうか？

もうひとつ気付いた。

このバスは先ほどから同じ道をグルグル走っている気がする。それからもうひとつ。

今来ている睡魔は自然のものじゃない。

この一年ずっとお世話になっていた睡眠薬の効果によるものだ。そっか……。

きっと人間の死体が主食になってもう十年近きたつ。

とっくに食料となる人間の数なんて底をついていたのだ。

それでも私達に仕事があり、食べるものがあり続けたのは……。でももうそれも良かった。

今の自分に平凡な暮らしをできる精神など残っていないし、起業できるアイデアが浮かぶ精神状態でもない。

果たして自分は選別の際に何というランクをつけられるのだろうか？

——いいところでDランクだな。

私の隣の席の若い男が寝言のように呟いた。

——お前じゃEランクにも満たないよ。

骨と皮ばかりの隣の男に心のなかでそう答えてから、私も迫る眠気に逆らわずに眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0914n/>

限りある資源としての死体再生法

2011年1月25日14時25分発行